

# いまなおエリクソンに学ぶ

津守 眞

## 娘による父親の回想記

エリク・H・エリクソンの名前を知ったのは、私が米国留学中の一九五二年だった。Childhood and Society (『幼児期と社会<sup>1</sup>』) が一九五一年に出版され、彼の名前は次第に米国の学生たちの間で語られるようになっていた。彼のもとでアイオア州立大学で勉強していた仁科弥生さんが、エリクソンの、この書物を翻訳したのが一九六三年で、エリクソンの名前は日本の

児童研究者の間で急激に有名になった。その後、『洞察と責任<sup>2</sup>』『自我同一性<sup>3</sup>』など、子どもの臨床を学ぶ人々には必須の専門書を数多く著述し、また、ルター、ガンジーなど歴史上に著名な人の伝記研究を出版し、英語文化の世界で幅広い影響力をもった。エリクソンの書物には、私が疑問をもったことがきつと取り上げられており、私は生涯でどれだけ彼のお蔭を蒙ったか、はかりしれない。ほとんど最後のお蔭を一九八二年に出版された『ライフサイクル、その完結<sup>4</sup>』

である。エリクソンは一九〇二年生まれで九十二歳で死んだ。

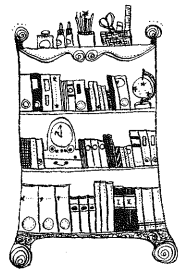
最近、彼の娘による父親の回想記が出版されたのを知り、早速取り寄せた。壮年期のダンディなエリクソンが、幼い娘を抱いている愛らしい写真を表紙のカバーにして、『名声の陰で エリク・エリクソンの娘による回想』と題した美しい書物である。著者のスー・エリクソン・プロウラントは、父親と同じく精神分析派の臨床治療家である。エリクソン夫妻の死後に、兄たちの同意のもとに二〇〇五年に出版された。書物の主題は題名が示す通り、有名な知的巨人の陰で娘が葛藤した精神の道程である。それに加えて、もうひとつ、この本の内容的テーマは、エリクソンが生涯自ら語る事がなかった障碍をもった子どものことである。私が尊敬もし、多くを学んだこの学者が沈黙していたことを書くのには大きなためらいがあったが、娘が熟慮したうえで公刊したのだから、それを取り上げ

て考えることは彼の評価をきずつけることなく、むしろ高めることになるのだと思う。

### もうひとりの家族

彼女の記憶は一九四〇年に遡る。その頃父親は『幼児期と社会』の著述に専念し、母親は両親が出会ったウィーン時代の衣服を整理したり、庭に果樹を植え、兄たちがそれを手伝っていた。母親が金工アートを始めたのもその頃で、彼女はその分野で既に才能を発揮していた。ヨーロッパからアメリカに移住して、ようやく生活が落ち着いてその頃の彼女の記述は、幸せな家族の生活描写に満ちている。エリクソンは私より二十歳年長だが、私はこの本を読みながら、戦前の私の子ども時代の日本の家族の生活を重ねて考えた。

三章、四章と読み進んだ時、私は大きな衝撃を受けた。エリクソン家にはもうひとり、障碍の子どもがいて、生まれてすぐにその子は施設に入って、生涯家に



もどることはなかった事実が述べられていた。もちろん、エリクソン夫妻には大きな苦悩があった。

「一九四四年のはじめ、母親は四人目の子どもを産んだ。彼はダウン症だった。一、二年しか生きられないと診断された。特別のケアのための施設に入れることをすすめられた。難産の後、母が意識を回復した時、この子の将来について、緊急の苦痛に満ちた選択を迫られた」。エリクソンがとくに信頼していたふたりの友人、ひとりは文化人類学者のマーガレット・ミードであり、もうひとりはユング派の友人J氏で、母親が赤ん坊を抱く前に子どもを施設に入れることをすすめた。私は留学当時に新進の文化人類学者ミードの講演を聴いたこともあって、親しみを感じていた。「母親

が抱く前に親から離す」という言葉は、あの時代の専門家がよく使った言葉だった。あの頃の専門的助言としては当然のことだった。あの時代に自分を置き換えてみるならば、私でも同じ判断をしたらうと思う。母親には、この子を家に連れて帰るといふ選択の余裕がなかったことが、その後の長い間、彼女の苦痛となった。

パールバックが『母よ、嘆くなかれ』<sup>6</sup>を書いたのは同じ時期である。日本でこの本が法政大学出版社から翻訳されたのが、私が愛育研究所で精神薄弱幼児の保育を始めた頃である。その当時を考えると、障碍の子どもが産まれることは家の恥と考えられた。障碍をもつ子どもを居住型施設に預けて専門家に委ねることが、その子にも家族にも幸せと考えられた。児童相談所でもそれを強くすすめる、その考えに反対するのは悪とすら考えられた。ノーマリゼーションの考えが一般的になる一九八〇年頃まではそうだったことは、私共

の記憶に新しい。

「その子のために何もしてやれなかったとの思いは、彼を手放す決心をしたことに対する（母親の）怒りを一層激しくした」と、娘は記す。「この子を外に出してしまったことに、母親が怒りをあらわにした時、父はこの子についてのコミュニケーションを完全にやめてしまった」。エリクソンがこの子どもについて沈黙した時、彼はそれだけ深く彼のことを心に思っていたのだと私は思う。このことについて、エリクソンを批判することはできないと私は思う。

こうして、生まれてすぐにこの子は施設に預けられ、二〇歳で死亡通知がくるまで、夫妻はこの子に会うことはなかった。兄姉も、この子のことは知らされていなかった。この秘められたこの物語が一冊の書物として公刊されたとはいえ、私はこれを書くにためらいを覚えている。だが、よく考えれば、他人には知られないで、実際には起こっていた家族の物語は珍しく

ない。当事者がそれを公にしたのだから、それをはっきり認識して考えることが、その人を正当に評価することになるのではないか。文章も思想も素敵だったあのエリクソンにも内奥の悩みがあったことを知った今、私は一層彼に親しみを感じる。母親にはこの子を家に連れて帰ることを選択肢とする余裕がなかったことが、その後長い間、彼女の苦痛となった。

著者のスーがエリクソンの最晩年の様子まで伝えてくれていることを、感謝せねばならない。死の数年前から、彼は静かな落ち着いた内面の世界に住んでおり、妻や子どもたちを見ると微笑みを返したがそれが誰かは明瞭でなかった。ある日父親を訪ねた時、一瞬喜びの表情が走り、弱々しい声で「私の娘よ」と母国語で言った時にはこの上ない感動を覚えたと言はれ、娘は記す。私自身も、私の父の最後が同様だったことを思い出す。父親よりも長生きしたエリクソン夫人は、最後まで身体的にも知的にも明晰だった。娘は母親自身

金工アーティストとしての人生を全うすることがなかったことを残念に思った。

### それから

誰でも時代の子であり、その時代の空気から全く自由になることはできないだろう。人間社会にはスーパーマンもいないし、英雄もいない。エリクソンも例外ではない。エリクソンは二十世紀の生んだ人間学における知的指導者として多くの人から尊敬され、学問のみならず、これからの社会の進む方向を指し示した。

私はエリクソンの著書をすべて読んだわけではない。読み直し、もっと考えてみたい箇所がいくつもある。二十一世紀になり、前世紀から引き継いで学び直したい書物、『Life History and the Historical Moment』<sup>7</sup>（個人の歴史とその出現の歴史的契機）を振り返ってみたい。膨大な彼の著作の最後のものに属する。これ

から展開を予期し、期待される部分である。エリクソンは六十歳を超えてからインドに旅行し、ガンジーの伝記を書いた。一九六八年夏である。彼はいつも個人の生きた歴史と、かかわった人々の観察と、その場所の歴史と、当面している課題とを問題にする。

見晴らしの良いケープタウン大学のジョンソンホールに到着した時、ちょうど年一度の記念式典の最中で、盛装した行列が『academic freedom（学問の自由）』と記した、消火されたトーチを逆さにして女子学生に導かれて行進していた。最初の講演でなされた宣言は、「われわれの大学に相談なしに、われわれの同意なしに、われわれの意見を加えることなしに、そして十分な理由なしに、皮膚の色にもとづいた法律を政府は定めてはならない」というものだった。「この大学で、誰が教えるか、誰が教えられるか、どのように教えるかを定める権利、誰が教えられるかを学問以外のいかなる基準にもよらずに決める権利を回復する

ために戦う、われわれはそのために献身する」。南アフリカではその後マンデラが登場し、それも過去になりつつある現代である。

### 洞察と知識

エリクソンが、この時の講演で強調したのは洞察である。

現代は、観察され、計量され、操作しうる方法によってつくられる知識が重視される。それに対して洞察（インサイト）は自分の内面を見る力であるとエリクソンは述べる。「洞察はわれわれが観察するものの中から何を選択し、何を評価するか、感情とモチベーションの中心を知らせませす。洞察は状況と自分自身の



内面を同時に見通す力、または行為です。青年期は洞察に対して開かれています。洞察はパッションネートな体験に発します」「知識だけでは方法の奴隷となつて、人間を解放することはできません。……知識と洞察とを両立させねばなりません」。

この講演がなされたのは夏だった。

「広島原爆の日、巨大な技術、最高の科学の頭脳の上に立って武力をほしいままにしている国、最も小さな人間が最小のものによって最大のものを払拭しようという衝動に駆られる、そういう国から私は来ました。同時に、これらのことにもかかわらず、知的な若者たちは熱情をもって国の内外で倫理の基盤を問い直し、非暴力によって、（時に暴力的に）これらの問題を問い直そうとしています」と。この講演のなされた一九六八年は、日本では大学紛争の最中であり、世界中で学生運動が盛んで、この時期に大学評議員会に学生が参加するようになった国は多い（日本ではそうで

なかった。

エリクソンは、ガンジーに深い尊敬と関心を払っていた。「Gandhi's Truth」、『ガンジーの真理』は、非暴力の戦いをしたガンジーがどのように成育したのかを主題にした伝記的作品である。有名な塩の道の行進でも、英国の軍隊が不慣れた熱帯の猛暑に曝されないように、ガンジーを指導者としたこの闘争運動の人たちは、敵のために道をあけた。「真理は暴力の使用を排除する」というのがガンジーのモットーだった。ガンジーの主張には普遍的倫理があった。「人は絶対的真理を知ることではできないのだから、したがって、罰することは人間の能力を超える。ガンジーは敵を排除せず、恥をかかせることもしなかった。それは悪循環を生み出すだけである」。

現代でもなお、エリクソンから学び続けねばならない課題である。

「大学以外で誰が知識のみでなく、目に見えない強力

な変化を自分自身の中につくり出すことを教えることができるでしょうか」とエリクソンは学生たちを励ました。

いま

この時から、さらに三十年を経た。この間の世界の様変わりを私共が現在体験している。いまや大学が目に見えない内心の力を失っているのかもしれない。大学ではない、幼い子どもの保育にそれは位置を移しつつあるのかもしれない。幼い子どもの方が、洞察に対する鋭い感覚を失わないでいる。この時代に保育者は勇気をもって、子どもの内心に応え、それを実践することを求められている。最近の日本の、子どもを巻き込んだ異常なまでの社会の事件、エリクソンが生涯抱えていた、家族の中の障碍の子どもを含んで、家族の中の人間の問題は人の心に深く突き刺さっている。

誰もがその誕生を祝った幼児が、その成育の途上

で、大人との間で、さまざまな悪と向き合っている。

一九七一年)

大人が、内心を根底から問い直すことを迫られているのではないか。私共のまわりには大小さまざまなそういう問題があつて、これまでの考え方では処しきれない。しかも、このことに世界と家族の平和がかかつている。現代はそういう大きな変化を感じさせる。二十世紀が見出した解答では手に負えない課題である。過去の考え方と、それを超える新しい考えとが絶えず衝突しながら、子どもの新鮮な芽を踏みつぶすことなく、よりよいものへとつなげていきたい。(保育研究者)

註

- 1 Erikson, E. H. : *Childhood and Society*. New York: W. W. Norton, 1951. (仁科弥生訳『幼児期と社会』みすず書房 一九七七年)
- 2 Erikson, E. H. : *Insight and Responsibility*. New York: W. W. Norton, 1964. (鑑幹八郎訳『洞察と責任』誠信書房

- 3 Erikson, E. H. : *Identity and the life cycle*. *Psychological issues*, No. 1. New York: International Universities Press, 1959. (小此木啓吾訳編『自我同一性—アイデンティティとライフサイクル—』誠信書房 一九七三年)
- 4 Erikson, E. H. : *The Life Cycle Completed*. *A Review*. New York: W. W. Norton, 1982. (村瀬孝雄・近藤邦夫訳『ライフサイクル、その完結』みすず書房 一九八九年)
- 5 Bioland, Sue Erikson : *In the Shadow of Fame: A Memoir by the Daughter of Erik H. Erikson*: Viking
- 6 Pearl S. Buck : *The Child Who Never Grew*. Woodbine House, 1950. (村岡久子訳『母よ、嘆くことなかれ』法政大学出版局 一九五〇年)
- 7 Erikson, E. H. : *Life History and the Historical Moment*. New York: W. W. Norton, 1975.
- 8 Erikson, E. H. : *Gandhi's Truth*. New York: W. W. Norton, 1969.